

ヒモロギヒロシ　なむの穴ずみみ

文化三年。白露空には赤い黄昏月。苔蒸す石段の果ての境内。身の丈九尺の仁王と浮揚する超弩級南部鉄器が睨み合ひ、俺らには繫縛された小娘が捨て置かれている。

鉄器の河内郡か三本砦。鉄腕が突きだしたのを契機に二怪の殴り合いが始まる。神域の静謐を侵す巨の呻きと金属音の残響と小娘の嗚咽。そして社の格子戸が豁然と開き放たれる音。中から痩せこけた泣きが見れたので、二怪は驚き殴り合いの手を止めた。

「おちおち寝てもおれぬ。その方々は我が同類と見受けるが、一体いかなる諍いか」
浪人は半眼で欠伸をしなげら。自らの正体を旅の貉と明かした。

「私は狐だが、小娘を手始めにやろうとしたところこいつが邪魔をした」と仁王が言い、「俺は狸だが、小娘を食おうとしたらこいつが邪魔をした」と南部鉄器が言い、そして小娘は「村は狐狸に犯し尽くされ食い尽くされ、私が最後の一人です」と泣きながら言った。

「化比べで勝負をつけなされ。俺の出す題に上手く化けた方の勝ちということにしよう」
貉は勝手に話をまとめると、一枚の丸版を南部鉄器に突き出した。そこには井のような形状の奇怪な船が描かれている。

「三年ほど前に常陸国に現れたうつろ舟、これに化けられたか……かような怪技術、お主の理解の範疇を超えておるかな」

南部鉄器は真つ赤になつて濛々と蒸気を吹いた。湯気が晴れるとそこには直立して腹鼓を連打する古狸の姿があった。

「侮るな。俺はひとつ鼓を打つごとにIQが1ずつ上昇するのだ」貉は感心したように頷くと、統べて仁王を見上げた。

「仁王の造作は運慶快慶に並び立つほど見事だが、所詮有形の物質にしか化けられまい」
「何の。狐変化の真骨頂は形而上にこそあり」

◇ 貉

「では、難解な数式から導き出される解それ自体に化けることは可能かね？」

貉は金属製の筆で平紙に数式を書き付けてみせた。狐はされこうべを頭に載せてぶつぶつ呪文を唱えた後、猛然と数式を解き始める。貉はそれを見て満足げに微笑んだ。

刻の後。船の倉庫に従い、両者一斉に変化を開始した。すなわち狸は未知の材質からなるアダムスキー型円盤に。狐はワームホール計算式から導き出される時空の歪みに。

「素晴らしき完成度だ。甲乙のけかたし」

「それは困る。白黒はつきりつけてくれい」

「ではまず、舟の乗り心地を横貸しよ」

貉は円盤に乗り込んで、器類をいじり、たじろ熱心に入力している。

「時空が正しく歪んでいるかも確かめよう」

貉を乗せた円盤は音もなく浮揚し、ワームホールの奥深くに達まるといった。それっきり狸も狐も貉も戻ってこなかった。円盤のハッチが開まる。そこに小娘は「ヤつと帰れ」と呟く。貉の涙声を確かに聞いたという。しかし彼女はもちろん、現代の我々においてさえも、彼の帰還した故郷の景色を未だ知らない。

